

# 「ヤングケアラー」に関する高校生・大学生等による当事者支援活動 (ピアサポート)の実態調査研究

静岡英和学院大学 人間社会学部 日比ゼミ (研究室)

指導教員：日比 優子 教授

参加学生：高木 滉太、清 光、梶 優一、他6名

## 1 要約

障がい児・者 (以下、同胞) のきょうだい (以下、きょうだい) に関する研究は十分とは言えず、本来大人が担うと想定される家事や家族の世話などを日常的に行っている子どもと定義される「ヤングケアラー」という言葉に端を発し注目されている。本研究の目的は、幼児期から青年期までのきょうだいの障害受容の過程を明らかにすることであった。その結果、まず、これまでなかったきょうだいの障害受容尺度の作成を試み、信頼性と妥当性の高い尺度ができた。次に、青年期は思春期に比べて、同胞のことを隠しておきたいといった感情が有意に高かった。また、青年期において男性よりも女性の方が同胞の面倒をみなければならないといった責任感が有意に高い傾向を示した。さらに、静岡県が実施した大規模調査の自由記述分析により、発達時期または性別によるヤングケアラーが抱える問題を明らかにし、支援法を提案した。

## 2 研究の目的

これまで、きょうだいであることによるネガティブ・ポジティブな影響や彼らの心理的支援の必要性が明らかにされてきたが (笠田, 2013)、研究の多くは個別のインタビューを通し行われてきた。各研究数名のきょうだいを対象とした小規模なものであるため、きょうだいの抱える心理的問題 (本研究では、障害受容に注目) の全体像とその支援は明らかでない。本研究では、比較的大規模に実施でき、統計的処理により、きょうだいの障害受容のなかの法則性を明解に表現できる量的な調査を行うことで、幼児期から青年期までのきょうだいの障害受容の過程を明らかにすることを目的とした。さらに発達時期と性別に応じた支援策の提案を試みる。

## 3 研究の内容

本研究の目的は、幼児期から青年期までのきょうだいの障害受容の過程を明らかにすることである。得られた結果として、以下の4点が挙げられる。一つは、これまで検討されてこなかったきょうだいの障害受容尺度の作成ができた。二つ目は、青年期は思春期に比べて、同胞のことを隠しておきたいといった感情が有意に高いことを明らかにした。三つ目として、青年期において男性よりも女性の方が同胞の面倒をみなければならないといった責任感が有意に高い傾向を示した。四つ目に、静岡県が実施した大規模調査の自由記述分析により、発達時期または性別によるヤングケアラーが抱える問題を明らかにし、彼らが求める支援策を提案した。

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

【内容】第一調査で、大学生約400名を対象に、きょうだいの障害受容の実態調査を行う。全国的なきょうだいの人数割合から推測すると約30名のデータが得られる。第二調査で静岡きょうだい会のご協力を仰ぎ少なくとも20名のデータが得られると期待できる。結果、中規模なデータ数に基づく量的な統計的処理による全体像把握ができる。【実施時期】5月中旬から予備的な調査を開始しており、7月初旬には第一調査の概要が明らかになる予定である。7月中旬に静岡きょうだい会と交流を開始し、9月初旬には第二調査を開始する計画である。10月には得られたデータによる統計的処理を行い結果の分析と考察を行い、それに基づく心理的支援策を提案する。並行してきょうだいとの個別の面談により支援策に助言頂く。2月にきょうだい会への報告・交流会も実施する。【成果】(1)きょうだい会への報告と交流により片方向にならない支援を目指す。

(2) 心理学の研究手法という大学の知的資源を地域に還元する。(3) きょうだい会と学生の交流により、地域社会の障がい児・者へ興味関心をもち、社会参加する学生を育成する。

### (2) 実際の内容 (B:一部修正)

5月中旬から予備的な調査を開始し、7月初旬には第一調査の概要が得られた。第一調査では大学生および社会福祉法人のご協力を得て約400名を対象に、きょうだいの障害受容の実態調査を行った。結果、19名のきょうだいの協力が得られた。8月末に静岡県と静岡きょうだい会との打ち合わせを行った。第二調査で、静岡きょうだい会などヤングケアラー関連団体のご協力が得られる予定であった。そもそも大学コンソーシアム申請受付時に、県のご協力と関連団体のご協力が得られると記載があった。応募し採択し県に連絡をしてから、県によるコンソーシアム参画自体の事実がないと県の返答がなされるなど、県職員の異動に伴う引き継ぎが全くなされていない

ことが判明した。今年度から引き継がれた職員の方は、できる範囲で尽力して下さったが、関連団体の協力は得られなかった。唯一頂けたご協力として、県が実施した調査の自由記述データを入手でき、それらを分析することで、きょうだいの支援策を提案することとした。

### (3)実績・成果と課題

本研究から得られた成果は主に4点である。一つは、きょうだいの障害受容尺度を作成ができた。詳細な分析を経て、信頼性および妥当性の高い尺度が作成できた(表1)。

二つ目は、青年期は思春期に比べて、同胞のことを隠しておきたいといった感情が有意に高かった(図1)。同胞の存在を恥ずかしく感じるにより、さまざまな場面で心理的な葛藤を感じるが多くなり、同胞の困難をきょうだい自身が補填しなければならないというプレッシャーを感じている(Meyer & Vadasy, 1994)。春野・石山(2011)によると、きょうだいの成長と共に確立された障害理解とそれに伴う感情にはプラス的感情もある一方、マイナス的感情の要因の一つとして、同胞が集める「周囲の目」を挙げている。また、山田・立山(1999)は、思春期のきょうだいは、同胞の将来に不安を抱いたり、強い責任感を感じ始めるとし、田倉(2012)は、青年期のきょうだいは周囲に対する意識の高まりから、同胞に対する葛藤も高まるとしている。以上から、本研究の結果も、同胞の存在を恥ずかしいと感じてしまうきょうだいの思いが、きょうだい自身の不安や葛藤が高まる思春期から青年期にかけて強まると考えられる。

三つ目として、青年期において男性よりも女性の方が同胞の面倒をみなければならないといった感情が有意に高い傾向を示した(表2)。吉川(1993)によると、きょうだいが女性の場合、男性に比べ同胞の世話をを行うことが多くなり、女性のきょうだいの責任の負荷の高まりに繋がっている。本研究でも男性に比べ女性の方が同胞への責任を強く感じていると考えられる。

四つ目に、県が実施した大規模調査からケアラー932名の自由記述分析により、発達時期または性別によるヤングケアラーが抱える問題を検討した。自由記述での抽出語と発達時期、抽出語と性別との共起関係を表した共起ネットワークを図2に示す。小学生は「募金」といった不特定の他者を想定した語と共起関係があるのに対し、中学生は「親」、高校生は「周り」「学校」と

表1 きょうだいの障害受容尺度

| <項目>                                     | 因子負荷量  |        |        | 共通性   |
|--|--------|--------|--------|-------|
|  | I      | II     | III    |       |
| <b>ポジティブ因子</b>                           |        |        |        |       |
| <b>I 周囲への信頼 (α=0.904)</b>                |        |        |        |       |
| 家族が求めていることに自然に配慮して手伝える                   | 0.564  | 0.294  | -0.021 | 0.566 |
| 家の中では何でも話が出来る                            | 0.632  | -0.043 | 0.442  | 0.806 |
| 私は問題が起こった時は、いつも家族を頼りにしている                | 0.813  | 0.069  | 0.078  | 0.795 |
| 家族は私の気持ちをよく理解してくれる                       | 1.063  | 0.033  | -0.222 | 0.995 |
| 障害を持ったきょうだいは目に見えない形で社会に貢献している            | 0.535  | 0.049  | 0.038  | 0.338 |
| きょうだいが障害を持っていると他の人がしったときその人は理解を示してくれる    | 0.529  | 0.097  | 0.206  | 0.505 |
| <b>II 共生志向 (α=0.879)</b>                 |        |        |        |       |
| 障害を持ったきょうだいは一生仲良くやっていきたい                 | 0.167  | 0.849  | 0.038  | 0.938 |
| 障害を持ったきょうだいは少しづつ成長していると思う                | 0.163  | 0.814  | -0.276 | 0.654 |
| 自分は成長したと思う                               | -0.124 | 0.731  | -0.034 | 0.434 |
| 障害を持ったきょうだいを大切にしている                      | 0.197  | 0.776  | 0.068  | 0.871 |
| 障害を持ったきょうだいのおかげで他の人にはできない経験が出来た          | -0.256 | 0.727  | 0.085  | 0.441 |
| <b>III 社会的非接触 (α=0.773)</b>              |        |        |        |       |
| 障害を持ったきょうだいのことはできるだけ隠していたい *             | -0.267 | 0.199  | 0.686  | 0.486 |
| 障害を持ったきょうだいが視線を集めるのは嫌だ *                 | 0.045  | -0.105 | 1.023  | 0.995 |
| 因子間相関                                    |        |        |        |       |
|  | I      | II     | III    |       |
| I  |        | -0.536 | -0.459 |       |
| II                                       | 0.536  |        | -0.473 |       |
| III                                      | -0.459 | -0.473 |        |       |
| <b>ネガティブ因子</b>                           |        |        |        |       |
| <b>I 孤立悲観態度 (α=0.894)</b>                |        |        |        |       |
| 障害を持ったきょうだいのことで、引け目や劣等感、被害者意識をいだいている *   | 0.869  | -0.103 |        | 0.686 |
| 障害を持ったきょうだいのことを考えると何もやる気がしない *           | 0.908  | 0.016  |        | 0.837 |
| 健全なきょうだいがいる友人がうらやましい *                   | 0.759  | 0.087  |        | 0.642 |
| 家族の中でひとりだけ浮いている *                        | 0.836  | -0.175 |        | 0.599 |
| 障害を持ったきょうだいと関わりのない生活をおくりたい *             | 1.000  | -0.230 |        | 0.849 |
| 自分と障害を持ったきょうだいで親の対応に違いがある *              | 0.501  | 0.333  |        | 0.510 |
| きょうだいで親の対応が違う事に不満がある *                   | 0.689  | 0.251  |        | 0.692 |
| <b>II 過度の責任感 (α=0.824)</b>               |        |        |        |       |
| 障害を持ったきょうだいの将来を見通しておかなければならないと焦りを感じている * | 0.046  | 0.625  |        | 0.419 |
| 自分のせいで障害を持ったきょうだいに良くないことがあると感じる *        | 0.346  | 0.667  |        | 0.770 |
| 働く親に代わって障害を持ったきょうだいの面倒を見なければならない *       | -0.151 | 0.991  |        | 0.872 |
| 障害を持ったきょうだいは自分が守らなければならない存在である *         | -0.265 | 0.895  |        | 0.660 |
| 因子間相関                                    |        |        |        |       |
|  | I      | II     |        |       |
| I  |        | 1      | 0.444  |       |
| II                                       | 0.444  |        | 1      |       |

注: \*が付いている項目は逆転項目を示す。

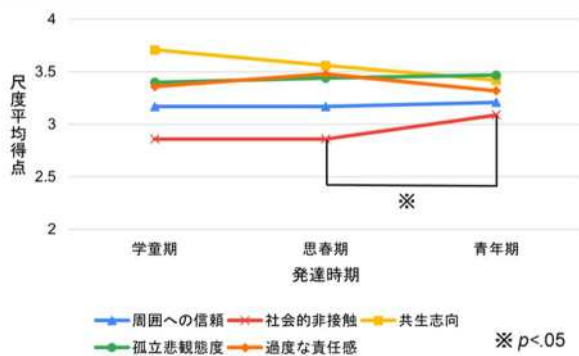


図1 各発達時期における障害受容尺度下位得点

表2 青年期男女別の障害受容尺度下位得点

|         | 男性   |      | 女性   |      |
|---------|------|------|------|------|
|         | M    | SD   | M    | SD   |
| 周囲への信頼  | 3.69 | 0.60 | 3.39 | 1.15 |
| 社会的非接触  | 3.43 | 1.13 | 3.17 | 1.37 |
| 共生志向    | 4.20 | 0.33 | 3.43 | 1.22 |
| 孤立悲観的態度 | 3.59 | 1.13 | 3.68 | 1.17 |
| 過度な責任感  | 2.71 | 1.07 | 3.69 | 1.03 |

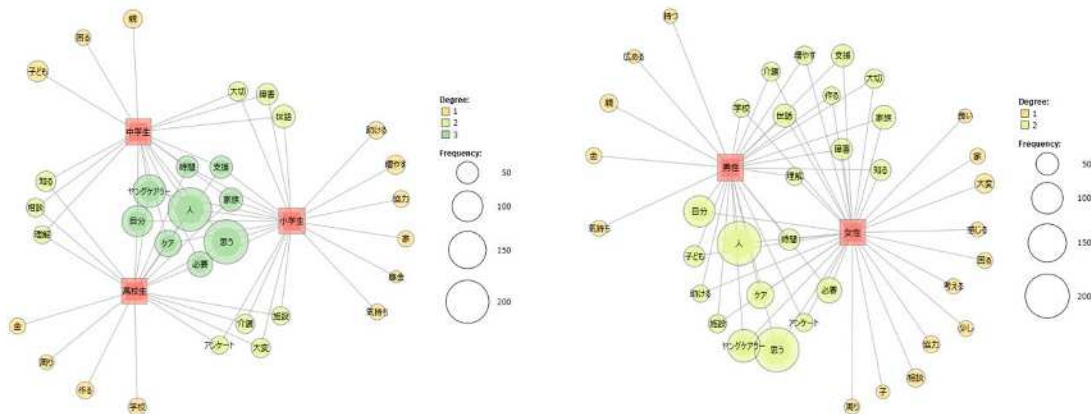


図2 抽出語と発達時期および抽出語と性別の共起ネットワーク

いった特定できる身近な他者を表す語と共起関係を示した。これは、発達時期に伴い支援を要請したいと考える対象が異なっていき、年齢に伴いより身近で具体的な存在になることを示す。また、男性は「広める」「金」など自身と間接的な関係性を想定しているのに対し、女性は「困る」「大変」といった自身が今現在直接感じている語を表出している。このことは、新たに実施した本研究の調査で得られた結果と一致し、男性よりも女性が重責を感じていることが窺える。

#### (4) 今後の改善点や対策

すでに述べたように全く計画通りに進まなかった。学生と本学に貴重な機会をいただいたことは感謝しているが、意欲のある学生たちが非常に悔しい思いをした。そのような状況の中で、学生は大変な時間と労力をかけ、できる範囲内で最大の成果を出したと思う。大学コンソーシアム運営自体も、協力を依頼した団体との連絡を密にとるなどサポート体制の確立をお願いしたい。

### 5 課題提出者・地域への提言

本研究の成果から、思春期から青年期の間で特にきょうだいの障害受容に変化があることが明らかになった。機会があれば作成した尺度を活用し、自ら言語化しにくいきょうだいの心理的問題を探る一助となればと願う。打ち合わせで、県によるヤングケアラー支援は開始しているが、ケアラーからの支援要請自体が全く得られていないとの現状を伺った。思春期から青年期のケアラーは「周囲の目」に対するネガティブな感情を抱きつつ、実際には身近な他者に支援要請を出したいと思っていながら行動に移せない葛藤を抱えている。さらに女性では、実際に厳しい困難を抱えているにも関わらず支援要請を出せずに重責を背負い続けている。中高生にとって身近とは言えない「行政」への支援要請を待つのではなく、彼らの学校や友人と行政が連携する方法を模索し、支援要請を受け付けるシステム作りの検討を始めるべきであると考えられる。

### 6 課題提出者・地域からの評価

この度は調査に際し、十分な御協力が行えず、誠に申し訳ございませんでした。各関係機関に調査の協力についてお願いをさせていただきましたが、自身が体験したケアの問題を振り返り回答することは、元ヤングケアラーの方々にとって想像以上に負担が大きい現状がございました。結果として、今回の研究では、静岡きょうだい会代表との意見交換及び当県の実態調査の提供に留まってしまったため、大変意欲的にヤングケアラーの課題に取組もうとしていただいていた学生様には申し訳なく思っております。県といたしましては、今回御報告いただきました実態調査研究の結果を、県のヤングケアラー支援施策等の参考とさせていただければと考えております。